

式子内親王齋院卜定

高田 友

(しよくしないしんわう さいみんぼくぢやう)

平安院政期の、藤原氏より入内したる二大佳人は、璋子たまこと多子またひらたるべし。

璋子は白河院の養女にして、院の御孫たる鳥羽天皇の中宮に冊立せられ、崇徳・後白河二帝の母となる。幼冲にして令人銷魂的絶代佳人（人をして魂を銷さしむる絶代の佳人）と讃へられ、院の異様な寵愛を賜はる所と爲る。崇徳帝の實父は鳥羽帝にあらずして、白河院ならずやと疑はるる所以なり。其の性不羈奔放にして、十七歳下の西行をして思ひを遂げしめたるの逸話あり。其の誘因を爲したまひし信心篤き院、佛の前にて如何なる辯明をかし給ひけん。

多子は先に崇徳帝の異母弟なる近衛帝の皇后となるも、帝は早世せられて皇太后となる。跡を継ぎ給ひける後白河帝は三年にして皇子に禪讓し、皇子踐祚あり。即ち二條帝におはします。茲に於て多子、十九歳にして太皇太后と稱へらる。璋子とは異なり、その爲人謙讓貞節、終生兩の背の君の菩提を弔ひて晩年を送る。

二條帝、已而戀慕し給ふの情尋常ならず、之を後宮に招かんとせらる。御父後白河上皇、先の帝の皇后を後宮に入るるは天地人いづれもいづれも許さざる所とて異を唱へ給ひけれども、主上「天子に父母なし」と嘯き給ひて、強ひて之を迎ふるに至る。多子に「二代の后」と異名ある所以なり。

璋子も多子も藤原北家閑院流。璋子（一一〇一生）より見れば、多子（一一四〇生）は姪孫てつそん。多子より見れば璋子は大叔母。すなはち多子は璋子の異母兄・實能の孫なり。而して、此れが一族は多子の姉忻子（きんし・よしこ）の後白河中宮と爲れるを始め、入内せる者尠しとせず。北家の庶流と墮したる閑院にして、かくのごとき榮に浴するは、家系まさに美女の系譜なりしがゆゑなりけん。

多子の母豪子は御子左家みこひだりより出でて、すなはち俊成の姉なり。然則しからばすなはち、多子は俊成の姪にして、定家の従姉たり。定家の燃ゆるが如き戀歌は、日頃麗人に接するの機會に恵まれたればなるらん。

多子の再従妹（はとこ／またいとこ）に、皇朝無二の女流歌人・式子内親王あり。

式子また容顔芳しく、九歳下の定家の思ひを寄せたりと傳へらるるは、閑院の血の然らし

むる所なるべし。

式子内親王の父は後白河院、母は忻子・多子の從姉違ひ（いとこちがひ／いとこの子・親のいとこ）なる從三位成子（高倉三位）。成子所生の皇子に守覺法親王と以仁王あり。皇女四人ありて、院は成子を最愛し給ひしかど、從三位（女御同格）に留まりて、中宮忻子の下風に立つの外なかりけるは、同じ閑院流とはいへど、すでに家格の差如何ともするを得ざりければなり。

式子内親王は、一一五三（或一一五四）年の出生。四歳にして保元、七歳にして平治の亂に遭ふ。薨去は一二〇一年なれば、十二世紀の後半を全うせしと言ひて大過なからん。

一一五九年、平治の亂勃發の前月、七歳なるに内親王宣下。時を同じうして齋院卜定あり。

伊勢齋宮と賀茂齋院を併せて齋王と言ふ。そもそも、伊勢と賀茂の齋王の仕ふる神の社を齋宮・齋院と呼び慣はしたれど、いづれの神に仕ふる皇女なりやの混同を避けんがために、社の名を藉りて、齋王を齋宮・齋院と分別するに至れり。

而して、皇女の中より麗質なるを選びて、龜の甲を焼き、その龜裂を以て吉凶を定め、齋王を選ぶ。これを卜定と言ふ。

齋王の更迭は新帝の踐祚に伴ふが常にして、こたびも前年に二條帝登極の儀ありければ、新たに神意を伺ひたるなり。

式子、齋院の座にありしこと十一年にして退下す。

退下したる齋院の例は、志賀の唐崎（大津）にて「唐崎の祓へ」を受けて後に入洛の段ありとの儀。

この祓へに際して、式子の作りたる歌一首残りてあり。ただ、その詞書の尋常ならざる、やはか喫驚せられであるべけん。知己より「『昨日は何ごとか』などと侍りける返り事に」とあり。祓へのをりに、あるいは事故ありて僵れたるなどの儀の想定せらるる所なり。

その歌は左のごとし。

みたらしや影絶え果つる心地してしがのなみぢに袖ぞ濡れにし

「みたらし」とは、神社の社頭なる口ゆすぎの水の謂ひ、「しがのなみぢ」とは「志賀（滋賀）の浪路」にして琵琶湖を指稱す。

その後、苦難の生涯を歩きたまひし内親王の行末を暗示する椿事ちんじの出来しゅつたいしたりしか。
社頭に倒れて、みたらしに袖を濡らしたるを近江の海の水に浸ひかりたるに準なぞらへ、以て涙
に暮るる我が身を嘆きたるかと思考する所以なり。なにゆゑの涙なりけん。

(令和三年四月二十四日受附)